

平成30年1月6日

南の風ウインターカップ特集号IV

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

大阪桐蔭はウインターカップの全試合を3-2のゾーンをメインに戦いました。目的をしっかりと持った3-2だったと思います。『何のための3-2なのか』と『相手にやらせてはいけないプレイは何か』がはっきりしていました。観ている人たちにも十分伝わりました。ゲーム全体を通して大阪桐蔭のディフェンスで際立っていたのは下記の5点でした。

- 1 コーナーやサイドラインでのダブルチーム
- 2 中を攻められてキックアウトされた時のローテーション
- 3 リバウンドの取り方とそこからのファーストブレイク
- 4 ゾーンプレスの掛け所
- 5 勝負所でのマンツーマン

以上です。1人ひとりのディフェンス能力が高く、5人のつながりが強固なかなり洗練されたゾーンディフェンスでした。また、4Qの最後とダブルオーバータイムの残り50秒で仕掛けたマンツーマンディフェンスは、タイミングも絶妙で相手チームを翻弄していました。

一方安城学園のディフェンスは、マンツーマンを主体としたディフェンスでした。マッチアップゾーンの併用なのか分からないところもありましたが、抑え所がしっかりとしたマンツーマンでした。準決勝の八雲学園戦で相手のエース4番奥山選手を徹底してマークしたように、決勝で大阪桐蔭の15番竹原選手にもボールを持たさないディフェンスが功を奏していました。こちら『やるべきこと』が徹底されていました。5人の意思の疎通がしっかりとしたディフェンスでした。以下の4点です。

- 1 相手のエースにボールを持たさない工夫
- 2 ボックスアウトの徹底
- 3 2-2-1ゾーンプレスの使いどころ
- 4 ペイントエリアを徹底して守る5人の協力

選手全員が『決勝戦でのディフェンスの目的』を理解して、それをコートできちんと表現できていました。安城学園は負けてしまったのですが、勝ち負けは結果であり選手はやるべきことをやり通したと思います。ペイントを中心に守ったため3Pを許してしまった場面があったのですが、『相手のオフェンスの何を守るのか』といった目的ははっきりしていました。相手オフェンスのすべてを守ることは不可能なのですから。観ている人にはたいへんに参考になった安城学園のディフェンスでした。

《オフェンスの戦術》

大阪桐蔭は15番の竹原を中心に中を攻め、外に合わせて3Pシュートやドライブインで切り裂くのがメインでした。しかし、安城学園のポストディフェンス（ダブルチームやトリプルチーム）に15番竹原選手が思うようにプレイすることができませんでした。そのため3Pやカットインに頼る攻めが目立ったのですが、私はチームのオフェンスを支え続けたのは8番の永井選手だったと思います。ずばりリバウンドです。彼女の常にオフェンスリバウンドに絡む姿は『お手本』でした。味方のシュートにいつも献身的に飛び込み、ボールに向かうメンタリティーの強さには頭が下がりました。